

上杉和央著

## 『江戸知識人と地図』

小野 将

本書は、歴史地理研究者の上杉氏が、既発表の諸論考や氏の博士論文をベースにして纏め上げられた、初の単著である。著者の上杉氏は、二十一世紀初めの学界に登場した気鋭の歴史地理学者であり、文献史学の分野で日本近世史研究に従事する評者は、偶々似通った研究対象を扱ってみたこともあって、これまでの氏の仕事に刺戟を受けるとともに、その充実した成果を高く評価したいと考えてきた。ゆえに、今回書評の機会を与えられたことは、評者にとってはまたとない好機であったが、何分専攻分野や研究伝統の相違も一方では大きく、専ら歴史学研究の世界で生きてきた評者自身が「歴史地理学」の世界にはいたって暗いことであつて、この場では誤解や理解の至らぬてんが多々あるのではないかと懼れる。ここでは、歴史地理学上での位置づけや、地理学研究に、固有の諸問題についてはそれら専門家による評価に委ねることとし、専ら日本近世史研究の視角からの議論に限つたうえで、書評してゆくことにしたい。

著者ならびに読者諸賢には、予めこのてんにつき御断りしてお

きたく、上記の事情からくる不可避的な過誤のたぐいについてはいづれ御批正いただきたいものと、まず最初に御願ひ申し上げておく次第である。

## 一 本書の構成と概要

本書は三部構成からなる。まず最初に、本書における章立ての構成を示しておく(なお、序章および第八章が新稿という)。

## 序章 知識人たちの森へといざなう地図

## 第一部 本居宣長の地理的知識

## 第一章 青年期宣長と地図

## 第二章 宣長の教育と地図

## 第三章 宣長と世界図——地図貸借と利用の観点から

## 第二章 江戸期最大の地図作成者、森幸安

## 第四章 「ナゾのカルトグラフィアー」の実像

## 第五章 森幸安の地誌と地図

## 第三章 地図と一八世紀の社会

## 第六章 地図貸借から見える知識人社会

## 第七章 博物学と地図収集ネットワーク

## 第八章 三才須知——地図収集の政治・思想的背景

\* \* \*

一瞥して判るとおり、本書の第一部と第二部は近世日本の十八世紀を生きた個人レヴェルに光を当てたもので、ここでは著名な学者たる本居宣長と、知名度では劣り些かマイナーな人物である地図作成者の森幸安の事例が扱われている。第三部に至つてこれら諸事例を結びつけるような、より広いコンテクストが追究され、

著者なりの見通しにおいて全体的な結論に導かれる、という構成となっている。総じて論旨は非常に明瞭で概ね理解しやすく、構成面でも著者の行き届いた配慮が反映されたものと感ぜられた。

本書の問題設定を明示する序章についてはすぐ後に振りかえることとして、以降の本論を順次みていこう。十八世紀後期の国学者・本居宣長を対象とする第一部は三章立てで、まだ「国学者」として名を成す以前の宣長（改名以前は小津栄貞と称した）が、その若き修学期において作成していた都市図や日本図を論じる第一章、宣長の修学過程と子息・春庭への教育における地図の扱いを取り上げる第二章、有名な上田秋成との論争において、論争したその銘々を使用した世界図について考証し、かつ地図収集の在り様に迫る第三章にわかれる。

近世日本の学者のなかでも、ひときわ多量の関係史料にめぐまれる松阪本居家の伝存史料（『本居宣長全集』）に集成された著作類は、きわめて浩瀚ではあるものの、家藏史料からみればその実、一部分をなすに過ぎない）を集中的かつ仔細に検討しただけあって、第一部の内容は非常に豊穡であり、まさに史料群の豊かさに見合った成果となっている。

宣長と地図、というこの組み合わせ自体は、従来から注目されていなかった訳ではないが、まだ一般的には目新しい問題設定であるとも言えよう。ここを突破口として、宣長をめぐる研究史（整理するだけでも大変な労力を要する位の、うんざりさせられる程にぶ厚い積み重ねの歴史がある）をも更新し得たところに、著者の提出した研究の意義があると考える。

第一章の分析対象は大きく二つあり、ひとつは修学期の

宣長がその創造にのめり込んだ架空の都市図「端原氏城下絵図」、もう一つは、これも宣長の作製にかかる大型日本図の「大日本天下四海面図」である（両者とも本居宣長記念館所蔵）。些か私事にわたるが、かつて評者はこの前者の絵図について分析を試みたことがあり、その論文の成稿後に、いち早く著者が提出された「端原氏城下絵図」の検討結果（初出は二〇〇二年）に接して、驚かされたことがあった。分野は異なるが同一の素材に関心もち、当時没交渉のまま並行して検討を加えていたことに気づかされ、やや衝撃を受けた。その際、上杉氏の論考を一読するに、その着実な検討結果には多くを教えられた。だが一方で、着眼点や分析水準が少しく異なっていたこともあり、実際には論点の重複はさほど見られず、自分の成果を世に問うことにも幾らかの意義が残されたものと、多少なりとも安堵したのが、今に思い出される（もつとも、着実な考証から逸れることのない精密な著者の眼からすれば、評者の論じ方についても、批判ないし否定されるところが存在するかもしれないのだが）。

この虚構の「空想都市図」及び、逐一これに対応している想像上の「系図」、著者によるこれらの読み取りと分析は、ディシプリンナリーな伎倆がいかなく發揮されていて実に精細であり、主として文学研究者たちが為してきた従来の検証結果を、大きく凌駕するものである。

もう一つの素材である大型日本図についても、その手本・素材に用いられた原図の解明（いわゆる「流宣図」等々）にはじまつて、その作成過程の詳細が説明されている。若き宣長の手による、地図作製上での地理情報の取捨選別について、その実態が明らか

にされており、これが「能動的な態度」と積極的に評価される（三九頁）に至るのである。

第二章は、修学する宣長の成長過程において地理的知識の位置づくところ、その関心の所在を辿り、その上で宣長の教育面における方針を考察している。とりわけ男子の春庭に施した教育において、大量の地図類の模写や書写を集中的に行わせた事実、著者は着目する。宣長がその教材としての効果を確信するところから、息子の春庭に、「図的理解」重視の学問教育を注入していた在り様が、捉えられてゆく。その後半生に失明しながらも語学上の一大業績をあげた本居春庭の、尋常ならざる生涯を考える上でも重要な研究となっている。

第三章ではまず、宣長収集の地図をめぐる相互貸借関係、その交流ネットワークが、書翰類をもとに明らかにされる。未刊の国図や都市図などは、入手するためにはこれを模写する他なく、収集を目的として交流関係が拡大していったことがわかる。続いて宣長と秋成との論争の考察に入り、両者がその知見を述べる基礎としていた世界図が異なるものであった、という注目すべき見解が提示される。念頭に置かれた図像がそれぞれに異なっていたことが要因となつて、両者の議論に齟齬が生じたのではないかとの説であり、蘭国由来のより新しい世界図に接していた秋成とは違つて、宣長の方は「一八〇年以上も前の情報」（一〇六頁）を基礎に論じていたという。著者は、学術情報の収集範囲における宣長の「限界」や「閾値」「境界線」を論じている。

宣長を含む交流ネットワークを論じる際、秋成の属した木村兼葭堂を中心とする上方の文化ネットワークとの関係に説き及ぶ部

分は重要である。両者は連接していたものの、そこに世界地理の知識共有が起ることはなく、そうした局面では、「そのネットワークは機能しなかつた」（二〇八頁）という。思うに、『平安人物志』や『浪華郷友録』に列挙されたような、濃厚な中国趣味を随伴したところの上方文化人たちが、十八世紀当時に形成していた高尚なサークルが風靡させた思潮というものは、努めて「漢意」の排斥にあつた宣長にとつては、到底容認しがたい性格のものだったのではあるまいか（なお、本書第七章の二七九～二八〇頁も参看されたい）。

第二部では、十八世紀中葉を生きた、文化人としてはよりマイナーな、しかし膨大な数量の地図製作で知られている、森幸安という地図作者が取り上げられる。元禄十四年（一七〇一）生まれの幸安は、既知の伝記情報が少ない人物であつて、地図作製の事績以外が不明なままの「ナゾのカルトグラファー」とも評されていたという。著者は先行研究の限界を指摘し、多くの事実を確定している。第四章は、基礎的な考証に充てられており、森幸安は晩年の十年間に大量の地図を作製したが、それ以前はむしろ地誌編纂者であつたこと、出身は京都町方で、御所にも出入りしていた「香具所」<sup>④</sup>を経営する叔父村山氏の家督を継いだこと、次いで享保年中に経営を離れ、大坂に移住した後は、京都周辺を主たる対象として地誌稿本を作成していたこと、が次々と指摘される。地図を作製する以前の時期の幸安は、「カルトグラファー」ではなく「トポグラファー」だった（一五五頁）という訳で、そこに幸安による著述の特徴が見出されるのである。

第五章では、これら地誌と地図の連関が詳述されている。森幸

安は最初に全国地誌作成の計画を立てており、そのうち「畿内部」の作成が一段落ついた段階になってから、地図製作に取りかかった。地誌と関連して過去の情報が記載された「歴史地図」（京都を中心とする）が製作され、さらにこれらを重層的に繋げた「歴史アトラス」の製作も視野に入れられていたという。寛延二年（一七四九）作成の地図上では、地誌的記載と図像とが相補的に組み合わされた「図書」という方法が述べられており、幸安の諸地図における余白部分に、詳細な文字注記が施されていることこそ、この「図書」の発想が辿り着いた「結論」であると、著者は評価している。

第二部では総じて、幸安による著作・地図におけるごく微小な記載までも著者の眼が拾い上げ、さらにそれらの情報を読み込んで整合的に繋ぎ合えたことよって、従来の研究を塗り替える質の成果に到達したものと見えよう。

第三部では議論のスケールがいつそう拡大され、近世日本の「一般読者層」のさらに上位に位置づけられるところの、十八世紀段階の「知識人社会」全体が取り上げられる。第六章では、第三章でも取り上げられたような地図貸借の交流関係を実現する上で不可欠だった、「知のネットワーク」について検討され、具体的事例としては、十八世紀後期の大坂天満宮商家である渡辺吉賢という人物をめぐる交友関係を基軸として論じられる。地図を収集していた渡辺は、多くの文化人や武士等から地図を借用・模写して一大コレクションを形成したこと、かつ本書第二部での主役をなした森幸安（この吉賢とは同世代）をふくむ地図収集家達と情報を共有すべく、相互貸借の関係をとり結んでいたことが、本

章では示される。そうした文化的ネットワークには、前掲の宣長や、大坂のコレクター・木村兼葎堂といった次世代に属する著名人も加わっており、諸身分や職分を横断して成り立つ質の交流関係であった。渡辺吉賢らの収集活動が、幸安の作製地図や、宣長の主著「古事記伝」の素材を成したことも主張されている。

なお、二一〇頁に「老中水野忠邦」と見えるが、これは水野忠之の誤りであり、修正を要するミスである。

本書最後に位置する二章は、こうした地図収集ネットワークの「時代背景」を探る内容となっている。まず第七章で著者は、前章でみた渡辺吉賢は「異物あつめ」でも知られ、かつ宝曆期に開催されていた「薬物会」「薬品会」への出品者でもあったことに注目し、それを皮切りとして、同時代の知識人界における「博物学的関心」のあり方に改めて視線を向ける。十八世紀当時の平賀源内や木村兼葎堂らによる諸国物産・器物の収集活動が、地理的関心に基づく地図考証と深い関係にあったを指摘し、当時日本全国に跨る「博物収集ネットワーク」が成立しており、地図収集目的での交流も、実際にはその一角を占める性格のものであったことを論じている。ここまで著者が論じてきた地図収集が、當時にあつては多種多様な「博物学的関心」の一環をなしていたことが、改めて確認されている。

最終章の第八章は、前章で提起した「博物収集と地図収集が結びついた思想的・社会的な背景」（二八〇頁）を、先行研究の咀嚼の上に論じるものである。著者のいう博物収集の文化においては、実物の図示による「正しい」表現というスタイル（二九三頁）が求められたとされ、図示の機能を担う出版物や写本も、実

物を補完するような収集対象となったことに注意が促される。このように正確な図版を重視する、視覚的に「正しい」知の所持を求めた文化こそが、著者により「収集文化」と命名されることになる(二九六頁)。この文脈から、地図は博物館の文化と蔵書・読書の議論をつなぐ存在として位置づけられるのである。

以上の「収集文化」形成の契機として著者が重視するのが、十八世紀前半、享保期の国家事業である。将軍吉宗の命による、採集使を派遣しての薬草検分や廻村産物調査といった、享保期の一連の殖産振興政策が、物産学の進展を促すとともに、地域社会にもインパクトを齎したことが述べられている。

最後に、この「収集文化」の思想的背景として、以下の指摘がなされる。近世の出版文化において、とりわけ貝原益軒の刊行著作(益軒本)が、広汎に流布したことが注目されている。その著書『大和本草』にみられるごとく、万物の解明を目指して知識を集成してゆく「博学」という姿勢が益軒の思想には認められること、そこでは具体的な「民生日用」の水準から出発しての学知こそが追求されていたこと、地理的知識もこれに資する一要素として理解されていたことが述べられ、その思想が、出版物を介する読者層への啓蒙活動により、当時の社会や後代の有識者に影響を及ぼしていたことが強調されている。

そもそも本書の序章では、地図を愛好した宣長や幸安のような個別事例の検討と、その背景をなす当時の文脈としての社会的・文化的状況の考察、さらにはそれら相互の関係性の解明が、最大の課題として設定されていた。相補的な視点で両者を視ることであり、そこで著者は、後者をいわば「森」に譬え、前者について

は、後者の構成要素をなす「木」に譬えていたのだが、その「木」と「森」の、十八世紀段階における全体的な在り様こそが問われていたのであった。さらにはその「森」の正体が「収集文化」とされ、産物や書籍や地図を交換し集積したのが、その担い手たる個々の知識人だった、という見取図が描出された。最後に、「収集文化」の政治的・思想的な背景をなした十八世紀当時の諸条件、それらを著者はいわば、「知識人たちの森」を生み出した「環境」といったように捉えなおしたことになる。以上、本書の全体構成は緊密に組み上げられており、そのことは、通読すれば大方は理解されるであろう。

## 二 本書の特徴

歴史地理学研究者としての著者の本領は、本書の第一部及び第二部で存分に発揮されている。この部分は実に地理学らしい考証・研究であるといえ、そこでの最新の成果として受けとめることができよう。またその一方で、本書第三部はより広く近世文化論への挑戦ともなっており、議論の対象も幅も大いに拡張されているのが明瞭である。近年非常に流行している感のある、書籍・出版物・読者層をめぐる近世文化研究(青木美智男や横田冬彦・若尾政希らが主導してきた)が積極的に摂取されており、文化人・知識人の主体形成の過程が取り上げられた本書の前半にも、そのことは反映されている。

十八世紀ともなると、地図というものが、図面・図版として一般に広く流通していたことの意義を強調する本書の主張は、当然のことながら、視覚文化論としても受けとめられるであろう。こ

れは特徴的な出版・製作技法の展開、あるいは絵画作品の存在や美術史的な問題とも関連付けることができるが、それ以外にも広く考証家や好古家といった文化人の世界や、あるいは園芸愛好家たちの織り成す文化等々、多種多様な諸テーマの広がりに関わってくるのであって、そうした諸ジャンル横断的な、魅力的な対象の発見が、本書に生彩をあたえていると思われる。

実際この本は、多数の収載された図版を見ているだけでも愉しく、何より「図を好む」著者自身が享楽しながら書いていたであろうと想像される程であつて、恰もその執筆態度が、読み手の側にもありありと伝わってくるかのようなのである。

評者にこうした印象を抱かせるような、たいへん読み進めやすい書きぶりもまた本書の特徴であり、リードブルながらもすぐれて実証的であるという、実現困難な狙いをクリアした出来栄えとなっている。著者の手腕の冴えを窺わせるところであろう。

### 三 若干の疑問と今後の課題

最後に、本書についての疑問点を述べる。まず第一部からは、本居宣長についての評価を取り上げておきたい。著者はまず第一章において、こう述べている。「……京都に遊学する以前の宣長は、松坂の木綿商の家にあつて、一般的な教育、平均的な生活を営んでいた。であるならば、京都遊学以前、青年期の宣長の検討結果は、江戸時代を代表する国学者宣長という特異な事例としてのみ扱うのではなく、同様の町人層にも当てはまる、より一般的な事例としても扱いうることになる」（八頁）。青年期の宣長はまさかかの著名な「国学者」ではないので、近世十八世紀における一

般事例として位置づけられる、ということにならうが、評者のような者には、どうしてもそのようには考えられないのである。

かつて評者は別稿において、宣長のような「国学者」の存在を近世身分制社会における「異端」と位置づけたことがあるが（注②所掲論文）、こと宣長の場合については、その社会編成の正統から外れた思想や実践面における周縁性のみを、そこで殊更に問題にしたのではなかった。松坂修学期以来の、彼の手による多数のテクスト群についても、「若き宣長は書物に認められる知を集積・網羅し、地図作成的な想像力をめぐらす空間表象の実践に携わることによつて、後年『古事記伝』に見られるような注釈の業績によつて顕在化させられることになる、特異な資質を陶冶していたのである」と評価し、さらには「突出したエクセントリックなものがある」とまで述べておいた。恐らくこのてんが、評者と上杉氏との間での、見解の最大の相違点なのであらうと思う。宣長が接した多数の書物からの抜書稿本作成にはじまつて、虚構の端原氏をめぐる系図と都市図づくりや、大型日本図の調製、これらの作業には相当程度の膨大な労力と時間、さらには資金もが必要な筈であり、同時代での大店の構成員一般にまで敷衍できるものとは到底思われぬ。先の引用文に見られるような「同様の町人層」なる存在が認められるとは、やはり考えたいものがある。

さらに本書後半との関連でいえば、宣長以外にも本書に登場してくる著名人、例えば平賀源内や上田秋成、初世木村兼葭堂らは、同時代の社会内にあつても、やはり相当あくの強い、エクセントリックな人物であつたことは動かしがたいのではないか。これに

本草家の戸田旭山や弄石家の木内石亭といった人物を加えてもよいが、強烈な個性で世に聞こえた者が多くあつて、果たしてこれらの存在を知識人層一般の問題として概括的に論じることが可能なのか、やや疑問なしとしない。

こうした存在が、十八世紀中後期、即ち宝暦〜天明期の上方に集中して認められることにも、注意を要すると思われる。著者が「知識人層」や「知的読者層」として取り出してくる諸事例は、近世的な都市性の刻印が認められるものがその多くを占めており、とりわけ京坂の事例が目立つ。全国的なネットワークの形成に比して、上方の濃密ながらもやや狭小な文化人サークルの所在が窺えるように読めたのであるが、文化状況を論じる際には、地域差の検証を欠くことはできないのではないか。評者は、十八世紀末までの段階では、京坂・上方の文化的先進性はなお卓越していた、と考えている。⑥ いったい雅文芸や書画といった上級文化における、十八世紀上方での諸方面に互る高度な達成に対しては、護園派の盛行などを除けば、江戸さえ比肩するところがないであろう。こうした全国的規模における文化水準の違いを、意識しておく必要はないだろうか。本書では、畿内近国を除けば地方の事例が多く挙げられないのも示唆的で、歴史学的な視点からすれば、今後は地域間・都鄙間における文化的伝播・交渉の過程を、より深く検討してゆく必要があるだろう。

次に、第三部で論じられている諸学術の状況についても、些か見解を述べておきたい。著者が、「そもそも日本の博物学とは本草学から出発しており」（二八二頁）、「本草学に起源を発する博物学的関心」（二八〇頁）と述べているように、十八世紀の多

種多様な産物収集の文化は、近世本草学の流れに端を発している。さてここで、近世日本本草学の研究史を振りかえってみると、およそ稻生若水から松岡恕庵（玄達）・小野蘭山に至る、京都中心の、漢籍に依存し読書人的な傾向をもった書齋派の本草学者が連なる系譜と、一方で江戸中心に展開した、阿部将翁・田村藍水（元雄）や平賀源内といった、実用本位で実地経験・技術実践を重視した本草学者たちの系譜とを、対立的に捉えた古典学説⑦が先ずは存在する。この通説に対して近年は批判が出されており、寛政改革後に江戸の学統は衰微したこと、幕府により京から江戸に招聘された小野蘭山を中心として一大学統が全国的に開花したことが実証的に解明された上で、この蘭山学統が近世後期に洋学に親近しつつ齎した高度な学術的達成を直視すべきで、さらには幕末にかけ本草研究が隆盛した意義を積極的に評価すべきである、と主張されている。⑧

本書は、源内や兼葭堂、戸田旭山といった本草に通じた知識人らを取り上げている。近世初発以降の本草学統の展開を見合わせるとき、上記のような研究史との関係では、本草学から博物学的関心へという、一般論的な説明のみでは、なお曖昧な部分が残るように思う。本源としての本草学から物産学へ、さらには博物学への展開過程を、単線的な理解に陥らぬよう、周到な用意をもって記述する必要がある。また一方では、近世段階の本草研究について、これを「博物学」と呼ぶことについて批判し、この呼称を留保する立場もある。地理学には直接関連しない事柄ではあるが、従来の研究史上の議論について、著者なりの整理を明示していただければ、と思われてならない。

続いて思想上の理解についても述べる。第八章において著者は、益軒本の思想の検討から出発して、儒学や医学、さらに支配思想における、「三才」の重視・追究に注意を促している。この三才には「天文」・「人事」と並んで「地理」が含まれており、こうした考え方が、地図収集の文化の背景をなすものとして重視されているのである。しかし、こうした評価では、やや一般的に過ぎるような印象をもった。近世思想史を研究する若尾政希によれば、貝原益軒の思想にみられる「天地の子」としての人、という観念は、「天地のコスモロジー」に支えられており、これは近世人のあいだで社会通念化した意識であるという。天地と人間の関係がコスモロジーを介して捉えられているというのであるが、こうした意識が一般的な社会通念であるとするならば、三才について述べている言説も、当時の常識的な一般論を繰り返すに留まることとなり、著者のようにとりたてて「思想的背景」として特筆すべき必要性は希薄になるのではなからうか。また、近世思想における天地と人間の関係論を検討するというのであれば、地理や医学とともに天文・気象・暦算などの諸分野も重視されるべきであって、こうした諸学の相互関係や意識形態について、総合的に検証する必要があるのではないだろうか。

章題の「三才須知」は、直接には『和漢三才図会』から採られたものと思われるが、その著者の寺島良安の議論そのものは、所謂「運氣論」に立脚しており、この運氣論こそ、先の若尾のところの、「天地のコスモロジー」の中核をなす思想モデルであった。これは、医学史上では「易医相通・三才須知」とされる発想法であって、占断に踏みこむ「易医」の思想にも親近する。こ

の辺りの事情も勘案した上で、再考すべき事柄なのであろう。総じて本書の第八章では、前段に比して抽象度を格段に上げていることで、趣旨の明確な理解を妨げるところが往々にして在るよう思う。

事例の一般性／個別性という問題についてはさらに、識字層の階層性についても検討すべきである。著者は、近世日本の識字層を一般読者層と知的読者層とに大別し、後者について、「新たな知的権威を求めた身分横断的な読者層がいわゆる知識人層を構成する」(ix頁)と述べている。しかし、近世社会の実態としては、い多少し複雑な在り様を想定する必要があるように思われる。教育史研究者の辻本雅史は、益軒本に於いて、次のように述べている。「一方には儒学(漢文)に親しむ少数の知識人層があり、他方に手習塾で識字能力を得ただけの圧倒的多数の民衆層がいる。そしてその中間に、漢文習得に至らないまでの、読書によって通俗的な学問を目指し、教養を身につけていた文化的中間層がある程度厚みをもって存在していた」<sup>⑩</sup>。本書の主題と大きくかわるところでは、民衆の世界と対比をなすところの、著作者・知識人層や「文化的中間層」の絡み合い、さらに文化的ヘゲモニーの所在と帰趨をも考慮に入れる必要があるのではなからうか。これは、当該期における文化ネットワークの規模と質を規定するような、重大な問題でもある筈である。

最後に、通時的な理解の仕方について。本書では「収集文化」形成の大きな契機として、将軍吉宗による享保期の諸政策が挙げられている。もちろん先行する諸研究から知られるように、享保期の画期性は明確で、そこでの著者の理解に問題はないのだが、



十八世紀の歴史的展開をみる上で、享保期の政治と並んで田沼時代の政策をも同様に重視する必要がある。田沼期の幕政は、財政収入増加や国益追求のために、産物振興や国産品増産を目指す開発政策を追求したのであり、「人參博士」田村藍水による朝鮮人參の国産化成功や、田沼意次が一時期は平賀源内の後ろ盾となった事実にみられるごとく、田沼期に新たな産業技術の知識が期待されたことが、初期の蘭学のみならず物産学一般の進展に及ぼした影響には、はかり知れないものがあり、決して軽視されるべきではない。

総じて著者が十八世紀をどのような歴史段階と位置づけているのが、問題となってくるのではないか。既に十七世紀末の段階で、貝原益軒を取り巻く人脈の間で地図情報が交換され、「世界図」への関心も共有されていたことが指摘されている。目を後の十九世紀に転じると、本草学や物産学の担い手、さらには「好古家」たちにより、諸物を対象に繰り広げられていた前近代的な学問領域の世界が、明治以降には解体されて、近代学知として再編成されたことを説く研究書も出されている。これとの類似で捉えれば、いまだ専門分野として未分化な、地図愛好家たちによる考証の世界から、近代諸学、地理学への転換はいつ、いかにして起きたのかという問題設定ともなろうか。いったい前後の諸世紀とは分かれたる十八世紀特有の質はどのようなものであり、また事態はどのように歴史的に推移・展開したのであるか。まさに時期区分と段階設定の巨視的な問題であり、本書より発して著者にお伺いしたいところである。さらに附け加えていうならば、本書の扱う時代以降までも、地図収集の文化とその消長を追跡する、

といった作業を完遂できるのは、この著者を描いて他にあるまい、と評者には思われてならないのである。

\* \* \*

以上、批判点や課題をいくつか書き連ねてきたが、本書の価値を些かも減ずるものではないということは、直ちにお判り戴けるのではないかと思う。

初めて著者の論稿に接した際、地理学にも議論の通じそうな手が現れたものだ、といった感慨を評者は抱いたのを、いまに記憶している。著者上杉氏の登場によって、近世日本を対象とする地理学研究と文献史学研究との対話可能性は、いっそう大きく開けたものと確信する。今後、著者の研究成果を推進力として、歴史地理学と歴史学全般とが、その連携・協働をさらに進展させることを願って已まない。

① 本書でも引用されているが、とりわけ重要なのが日野龍夫の仕事であろう（『日野龍夫著作集 第二巻 宣長・秋成・蕪村』ぺりかん社、二〇〇五年）。

② 小野「『国学』の都市性」（鈴木博之他編『シリーズ 都市・建築・歴史 6 都市文化の成熟』東京大学出版会、二〇〇六年）。なお附言しておけば、評者の議論においては、宣長による都市空間プランの構想と、近世伝統都市の身分制的な社会・空間構造との連関如何を問うところに、その主眼があった。

③ この問題については、さしあたって中野三敏「十八世紀の江戸文芸」（岩波書店、一九九九年）の見解が基礎的なものであろう。

④ 引用史料にいう「御香具所」といった、「公武」出入関係を有した御用商人の存在形態については、近世都市史研究で殆ど深められてい

ないように思う。また、二四頁所引史料に出る「番具師の長」といった呼称からすれば、調香等に従事する職人的な要素をも考察する必要があるかもしれない。いずれにせよ、今後のさらなる検討が必要であろう。

⑤ この渡辺吉賢を検討する上での前提となるであろう、天満宮祝部渡辺家の社会的位置は、不詳なままである。従来、諸研究では、社頭内部での神職共同組織の実態が解明されていないからである。

⑥ このてん、後藤雅知他編『身分的周縁を考える』（吉川弘文館、二〇〇八年）所収の書評論説でも、閑説してふれたことがある。地誌編纂事業や世界地理研究にコミットした、懷徳堂系の学者もここに含まれよう。陶徳民「懷徳堂朱子学の研究」（大阪大学出版会、一九九四年）など参考のこと。

⑦ 尾藤正英「江戸時代中期における本草学」（東京大学教養学部人文科学科紀要 第十一 歴史と文化Ⅱ——歴史学研究報告第五集、一九五七年）にもとづく見解で、古島敏雄学説の影響を受けている。

⑧ 遠藤正治「本草学と洋学」（思文閣出版、二〇〇三年）。

⑨ 平野恵「十九世紀日本の園芸文化」（思文閣出版、二〇〇六年）。

⑩ 「近世における『日本』意識の形成」（若尾・菊池勇夫編『覚醒する

地域意識』吉川弘文館、二〇一〇年）。

⑪ 石田秀美「博物の眼と臨床の眼」（山田慶兒編『物のイメージ』朝日新聞社、一九九四年）。

⑫ 『教育を「江戸」から考える』（NHK出版、二〇〇九年）、五二頁。

⑬ 藤田寛「田沼意次」（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）。

⑭ 渡辺美季「竹森道悦と地図奉納」（『九州史学』一四六、二〇〇六年）。

⑮ 鈴木廣之「好古家たちの19世紀」（吉川弘文館、二〇〇三年）。

⑯ 既に研究蓄積の備わるところだが、近代以前についてはなお手薄であったために、著者のような視角からの研究は提出されてこなかったのではないか。アカデミックな地理学の制度化自体が、二十世紀まで遅れてずれ込んだことも、研究状況と関係するのであるか。さしあたり水内俊雄「地理思想と国民国家形成」（『思想』八四五、一九九四年）など。

（A5判 三五五頁 図表一覽三頁 索引八頁 二〇一〇年二月

京都大学学術出版会 四二〇〇円）

（東京大学史料編纂所）